

転換を図った評価観に基づく実践で、 評価を生徒のさらなる成長の機会に 山形県立米沢興讓館高校

山形県立米沢興讓館高校は、2015年度より、従来のペーパーテスト中心の学習評価からの脱却を図ってきた。育成を目指す資質・能力「興讓館3DOC」を策定するとともに、学習評価に関する校内研修や、多様な評価方法の実施週間などの取り組みを通じて、教師の評価観の転換を促進。18年度にシラバスを改訂し、全教科・科目で観点別学習状況の評価を実施している。

探究学習をきっかけに 多面的な評価の必要性が高まる

山形県立米沢興讓館高校が観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）に関する校内研修を初めて行ったのは、2015年度のこと。12年度にSSH（*）の指定を受けて始めた探究学習をきっかけに、学習評価の見直しの機運が校内で年々高まっていた。教務主任の石黒吉寛先生は、当時の教師たちの変化を次のように語る。

「探究学習では、課題を見いだし、情報の収集とその整理・分析を行うて、まとめ・表現する、そのプロセスが重要です。探究学習を続ける中で、

結果を評価するペーパーテストだけでなく、プロセスにおける成長も可視化する評価方法も必要ではないかと、多くの教師が感じていました」

18年度の探究科新設が決まり、探究学習が同校において一層重要な教育活動として位置づけられることになったことから、多面的な評価の開発に全校で取り組むことになった。最初に着手したのが、学習評価に対する教師の意識転換だ。

「生徒を多面的に評価する大切さを分かっていても、定期考査や小テストの得点を基に成績や評定をつけるのが『学習評価』だとする評価観から抜け出すことは、なかなか難しい様子でした。それは、評価方法を

変えることへの抵抗感や、進学校としての責任を果たせなくなるのではないかとといった不安があったからだと思います。学習評価に対する思い込みの払拭や多面的な評価への理解促進が課題でした」（石黒先生）

そこで15年度、学習評価のあり方や、ペーパーテスト以外の評価方法などを改めて学ぶ校内研修を、北海道大学高等教育推進機構の鈴木誠名誉教授を講師に迎えて実施した。

「学習評価は、評価の内容を生徒にフィードバックし、生徒がさらに伸びるための指針となるものにするべきだと、鈴木名誉教授は強調しました。ペーパーテストの結果を見るだけでは学習評価の目的は達成できない

いこと、学習評価を生徒の学びや教師の指導の改善に活用することなどを学びました」（石黒先生）

それ以来、評価に関する校内研修を年2〜4回実施してきた。教科ごとにグループを組んで評価項目や評価方法、ポートフォリオの活用について検討したり、担当教科・科目が異なる教師から成るグループで評価の観点やルーブリックの内容について議論したりと、教師同士で対話し、評価観の共有を進めた。週1回の教科会で、評価方法を研究した教科もあつた。

校内研修を活性化させるために工夫もしてきた。

「本校では、それまで校内研修を

* 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。

次につながる学習評価

山形県立米沢興譲館高校

◎1776（安永）年、米沢藩中興の祖とされる上杉鷹山が再興した藩校・興譲館を起源とする。文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」指定は現在3期目。20年度、SSHのうちの「科学技術人材育成重点校」の指定を受ける。

◎設立 1886（明治19）年

◎形態 全日制／普通科・探究科／共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東北大、山形大、筑波大、東京大、新潟大などに115人が合格。私立大は、東北学院大、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ222人が合格。

◎URL <http://www.yonezawakojokan-h.ed.jp/index.html>



教務主任
石黒吉寛
いしくろ・よしひろ
教職歴21年。同校に赴任して12年目。



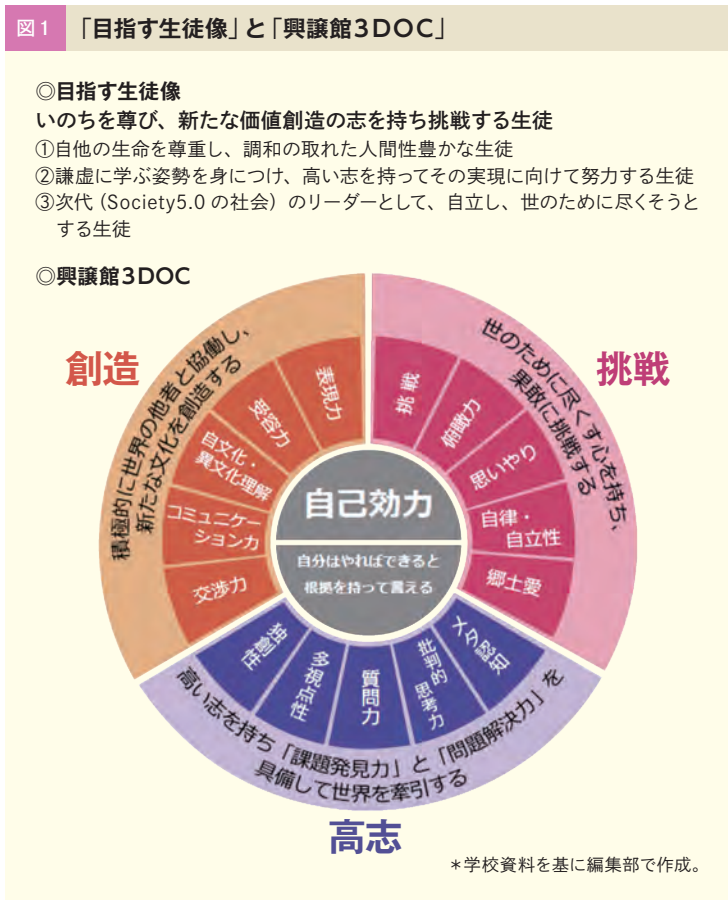
校長
柿崎悦子
かきざき・えつこ
教職歴35年。同校に赴任して2年目。

行う文化がなかったもので、最初は研修の実施自体に戸惑う教師もいました。講師の予定などを優先して急に研修日程が決まることもあり、それがさらに教師を困惑させる要因になっていました。そこで、17年度からは実施時期を決めて年間行事計画に組み込み、研修の内容や進め方も事前に伝えるようにしました。心の

準備をした上で研修に臨めるようにしたところ、戸惑いの声はなくなっていました」（石黒先生）

目指す生徒像を見直し、「興譲館3DOC」を策定

学習評価のあり方を見直す過程で同校が改めて着目したのは、目指す生徒像だった。柿崎悦子校長は、その理由を次のように語る。
「本校は藩校・興譲館からの歴史



の中で、常に時代に即応した人材育成に努めてきました。テストで高得点を取れることだけが、激変する現代社会においてリーダーシップを発揮する力につながるとは思いません。生徒にどのような資質・能力を育成し、それをどう評価すべきかを検討する前に、本校が目指す生徒像を見直す必要があると考えました」
そこで、校内研修と並行して、有志の教師が立ち上げた「興譲館将来構想委員会」において、目指す生

徒像とそれを実現するために育成する資質・能力を検討。16年度、自己効力を中心に「高志・創造・挑戦」を3本柱とする資質・能力から成る「興譲館3DOC（Domain Of Competence）」（図1）を策定した。
「興譲館3DOC」の中心に位置づけられている「自己効力」は、「私にもできるかもしれない」という自分の知識や技能への自信や信念」と定義し、「興譲館3DOC」の育成を通じて生徒のそれを高めることを、学校教育目標とした。
「生徒は、テストの得点だけで評価されると自信を失い、本来の力を発揮できなくなってしまうことがあるのではないだろうか。多様な資質・能力を評価し、『自分にも何かできるかもしれない』といった自信を生徒一人ひとりに持たせて社会に送り出すことが、教育の果たすべき責務だと考えています」（石黒先生）

シラバスに評価の観点・方法と「興譲館3DOC」を明記

18年度、全学年同時に全教科・科目のシラバスを改訂し、観点別評価を導入した。1年次から学年進行で

図2 2020年度シラバス 1学年「物理基礎」

令和2年(2020年)度年間授業計画表									
学年	1	科・系	普通科	単位	2	教科	理科	科目	物理基礎
学習目標	① 日常生活や社会との関連を図りながら物体の運動と様々なエネルギーへの関心を高める。 ② 観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を身に付ける。 ③ 物理学の基本的な概念や原理・法則を理解し、科学的な見方や考え方を養う。								
単元と内容									
1学期	速度 加速度 物体の運動 力とそのはたらき	速さと速度の違いの理解、加速度的な変化の意味の理解 (v-t図、a-t図による等加速度直線運動の式の導出と公式の活用) 力の要素と種類を理解、力の合成や分解の仕方を実験 による探究を通して、事象を科学的に考察し、導き出した考えを的確に表現している。							
各観点別に評価の趣旨を明記									
評価の観点		評価の趣旨			評価のフィードバック				
					1学期末	2学期中	2学期末	学年末	
①	関心・意欲・態度	自然の事象・現象に関心や探究心を持ち、意欲的にそれらを探究しようとするとともに、科学的態度を身に付けている。			○	○	○	○	
②	思考・判断・表現	自然の事象・現象の中に問題を見だし、探究する過程を通して、事象を科学的に考察し、導き出した考えを的確に表現している。			○	○	○	○	
③	観察・実験の技術	観察、実験を行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理し、自然の事象・現象を科学的に探究する技術を身に付けている。			○	○	○	○	
④	知識・理解	自然の事象・現象について、基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。			○	○	○	○	
各観点の評価方法を明記									
①		②		③		④		⑤	
評価方法		評価方法		評価方法		評価方法		年間時数	
授業態度 30% 小テスト 40% 課題提出 30%		ペーパー試験 70%		実験レポート 100%		ペーパー試験 50%		予定	
		実験レポート 30%				小テスト 50%			
育てる興譲館DOC 「批判的思考力」「質問力」「多視点性」「表現力」「コミュニケーション力」									
D 「メタ認知」「批判的思考力」「質問力」「多視点性」「自律性」「受容力」「表現力」「交渉力」									
C 「コミュニケーション力」「自己理解」「異文化理解」「自律性」「自立性」「思いやり」「質問力」「協働性」「他感」									

*学校資料を基に編集部で作成。

「興譲館3DOC」のうち、当該教科・科目が育成を目指す資質・能力を明記

実施する案も検討したが、学校全体で学習評価の意識改革を図ろうと、全校一斉で実施することにした。それまでのシラバスは、学習目標や使用教材、進度などが記載され、生徒が自分で学習を進めるためのツールとして位置づけられていた。その様式を見直し、新しいシラバスには、学習目標、単元とその内容に加えて、現行課程の評価の4観点である「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」とその趣旨、各観点の評価方法（授業

態度、課題提出、小テストなど）を明記。さらに、19年度からは、「興譲館3DOC」のうち、当該教科・科目で育成を目指す資質・能力を示した(図2)。そのように、資質・能力ベースの教育目標と学習評価の観点・方法を見える化したことで、生徒にとっては学習改善、教師にとっては授業改善に生かせるツールとなった。「多様な観点で学習評価を行うと同時に、本校が育成を目指す資質・能力と各教科・科目の授業がどのように結びついているのかを、常に教

師が意識しながら授業を行えるようにしました。生徒も、評価方法が分かり、多様な資質・能力が評価されていることを実感できます。『この科目は、発表が重視される』『小テストも気が抜けない』などと、学習に取り組むモチベーションにもつながっていると思います(石黒先生) 教師の評価観の変化とともに、評価方法の多様化が進んでいる。例えば、OPP(ワン・ページ・ポートフォリオ)は、1時間の授業や各単元の学習内容とその理解度、授業の感想などを記入するプリントだ。日々の授業において、主に「関心・意欲・態度」を評価するために運用している。「多様な資質・能力を評価するためには、生徒の日々の活動を記録する必要があります。定期考査の得点だけでなく、生徒が何を考え、授業にどのように向き合っているのかといった点も評価する必要があるという、先生方の評価観の転換があったからこそ、多様な評価方法を導入できたのだと思います(石黒先生) 定期考査では、どのような資質・能力を測る問題なのか、設問ごとに評価の観点を示す教科・科目が増えている。知識の定着度のみを見てい

たペーパーテストも、多様な資質・能力を測るツールになりつつある。

1学期の中間考査を、多様な評価方法の実施期間に

教師の意識改革を促す上で大きな役割を果たしたのが、1学期の中間考査を多様な評価方法で多面的な評価を行う「1学期中間評価期間」(以下、評価期間)だ。ペーパーテスト以外の評価方法を開発・浸透させるとともに、同様に異動直後の教師への多面的な評価の普及も兼ねて設定した。

実施期間は7日間で、通常の定期考査と同様に、期間中の部活動は休止としている。同期間の授業中は、パフォーマンステストや口頭試問、面談、グループワーク、発表など、各教科・科目が、教科特性や評価対象に応じた評価方法を選んで実施。1年目の18年度は、ペーパーテストを実施した教科・科目が目立ったが、19年度以降は、ペーパーテストの比率が低くなり、パフォーマンステストを実施する教科・科目が増えた。例えば、英語科では、以前から実施したいと考えていたパフォー

ンステストを導入。評価期間が設けられたことで、生徒一人ひとりにスピーキングテストを行う時間を確保できた。それをきっかけに、1学期以外の中間検査や期末検査でもパフォーマンステストを実施できる方法を考えるようになった。

「各教科・科目が様々な工夫する様子を見て、ペーパーテストだけが学習評価の方法ではないと、多くの教師が実感しました。生徒にとって、ペーパーテスト以外の方法で自分の力を示す機会があることが分かり、学習意欲の向上につながっています」（石黒先生）

その一方で、多面的な評価はペーパーテストを決して否定するものではないと、柿崎校長は強調する。

「ペーパーテストは、知識の定着の確認には適した評価方法です。教師が長年をかけて研究し、ノウハウを積み上げてきた評価方法であり、必要性があるにもかかわらず、全く実施しないのは本末転倒です。これからのペーパーテストは、知識の定着を確認する問題、思考の過程を見る問題といったように、評価する資質・能力を明確にした上で作問することが求められるのだと思います」

評価は自分を見つめる機会 果敢に挑戦する生徒たち

「興譲館3DOC」の中心に位置づけられている自己効力の測定も、教師の評価観の転換に大きな役割を果たした。

同校では、鈴木名誉教授が開発した自己効力測定尺度による評価を、同名誉教授の指導の下で自校用にアレンジし、6月と11月に実施している。そこでは、「統制感」「手段保有感」「社会的関係性」「メタ認知」の4つの尺度の全37項目を設定。生徒はそれぞれの項目について4段階で自己評価し、質問群ごとの平均値を算出することで、一人ひとりの自己効力を可視化している。結果は全教師で共有し、特定の項目の数値が低い生徒や、全体的に数値が下がった生徒には、教師が面談や声かけを行うなど、生徒指導に活用している。

「本校の学校教育目標である自己効力の到達状況が可視化されたことは、『興譲館3DOC』の理解と多面的な評価の浸透につながりました」（石黒先生）

一連の取り組みにより、教師の評価に対する意識は大きく変化。明確

な根拠を基に評価できるようになったことで、観点別評価の意義を多くの教師が実感している。

生徒の意識も変化している。学習意欲が高まり、授業中の質問が増えている。生徒へのアンケートでは、「自分を見つめる機会を多く得ることができた」「自分が成長するためには、どうしたらよいかを確認するきっかけになった」といった声が寄せられ、評価を前向きに捉える姿勢がうかがえた。鈴木教授によると、自己効力測定尺度の数値は通常、学年が上がるにつれて下がるが、同校の場合、1回目より2回目の方が数値が上がるが多いという。

「『生徒が明るくなり、学校の雰囲気が変わりましたね』と、保護者からよく言われるようになりました。学校行事や課外活動、進路選択などの場面で果敢に挑戦する生徒が増えているのも、大きな変化です。そうした生徒の変容を感じているからこそ、教師は観点別評価に意義を感じ、前向きに取り組むようになったのだと思います」（柿崎校長）

観点別評価が浸透しつつあること、そして評価は本来、期間を設けて一斉に行うものではないことか

ら、評価期間を取りやめ、多面的な評価の実施時期は、各教科・科目に判断を任せることも検討中だ。

今後の課題は、教科外活動と「興譲館3DOC」を関連させることだ。学校行事や課外活動などにおいても評価の観点を示し、ルーブリックを作成して評価することで、生徒の成長を可視化していきたい考えだ。

「学校行事を始めとする教科外活動も、生徒の大きな成長の機会であるにもかかわらず、何のための活動か、各活動の目的が明確になっていない状況です。『興譲館3DOC』の中のどの資質・能力を育成する活動なのかを明らかにすれば、各活動の内容や質も変わっていくことでしょう。学校生活のあらゆる場面で生徒の成長の機会にしていきたいと考えています」（柿崎校長）

引き続き、評価方法の多様性を追求していくことも課題だ。

「本校の観点別評価は、以前から行ってきた評価方法を観点別に振り分けたという状態であり、新しい評価方法の開発までには至っていません。試行錯誤を重ね、生徒の前向きな姿勢を引き出すような評価方法を見いだしていきます」（石黒先生）